



# 筑紫女学園大学リポジト

## 古典インド文法学における原因について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 筑紫女学園大学 人間文化研究所 公開日: 2024-10-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石村, 克 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/2000020">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/2000020</a>

# 古典インド文法学における原因について

石 村 克

On *hetu* in the Indian Grammatical Tradition

Suguru ISHIMURA

筑紫女学園大学  
人間文化研究所年報  
第34号  
2023年

ANNUAL REPORT  
of  
THE HUMANITIES RESEARCH INSTITUTE  
Chikushi Jogakuen University  
No. 34  
2023

# 古典インド文法学における原因について

石 村 克

## On *hetu* in the Indian Grammatical Tradition

Suguru ISHIMURA

### 0. はじめに

ボージャ・デーヴァ（十一世紀）は、『シュリンガーラプラカーシャ』で、修辞学と演劇学を論じる前に、パーニニ文法学を基盤にして聖典解釈学や論理学を批判的に取り込みながら、言語論を統合的に論じている<sup>1</sup>。その中で、古典インド文法学における原因に関わる概念について、主にバルトリハリ（五世紀）の言明をもとに敷衍して説明している。バルトリハリは、『ヴァーキヤパディーヤ』第三卷第七章第24詩節から第27詩節で、〈結果実現因〉のそれ以外の類似意味項目からの違いを論じている。それを敷衍して、ボージャは、〈結果を生み出す能力を持つ実現因〉の特殊性として、領域 (*viṣaya*) の多様性、実現手段性 (*nirvartanabhāva*)、代替 (*pratinidhi*) の不可能性、能力の所属基体、格接尾辞の領域、有利・不利の中立性、自身の働きが認められないこと、認識させる原因（認識因）ではないことを挙げている。

本稿の目的は、ボージャの言明に基づいて、古典インド文法学における原因に関わる概念を整理することである。

### 1. 古典インド文法学の意味論

原因に関わる文法学における概念を見る前に、その基本となっている文法学の意味論について概観しておく。

#### 1.1 古典インド文法学の世界観

古典インド文法学の意味論が扱うのは、実在の世界ではなく、言葉を使用する話し手の表示意

因 (vivakṣā) の世界である。その世界では、行為 (kriyā) が実現対象 (sādhya) として主要要素であると見做される。そして、行為を実現する能力を持つ特定の諸実体 (dravya) が実現手段 (sādhana) として行為に関係する (後述するようにボージャはそれを「行為実現因」(kāraṅka) という文法術語の意味であるとする)。さらに、行為と諸実体に、それらを修飾する諸要素が関係する。それらの要素には、限定要素 (viśeṣaṇa)、原因 (hetu)、特徴 (lakṣaṇa)、所有者 (svāmin)、随伴者 (sahayukta) などが含まれる。その場合、行為と特定の諸実体の〈実現対象と実現手段の関係〉、および、その諸実体の間の関係やその二者に対する多様な修飾要素の関係のうち、前者が主要なものであり、後者は従属的なものと見做される。また、関係は二つの関係項に属する一つの属性であるが、関係項の各能力としても捉えられる<sup>2</sup>。例えば、因果関係は、原因の能力、あるいは、結果の能力によって含意される。なぜなら、能力は相関的なものだからである。

ボージャは、文の構成要素である単語を、上記の〈行為〉〈実体〉〈修飾要素〉というその意味の違いに基づいて、行為表示語 (kriyārūpa)、行為実現因表示語 (kāraṅkarūpa)、修飾的意味表示語 (upakāraṅkarūpa) という三種に分類している<sup>3</sup>。行為表示語である定動詞および特定の動詞派生名詞に属する動詞語基によって行為が、行為実現因表示語である名詞の語基によって諸実体が、それらの接尾辞によってその両者の能力・関係が表示される。さらに、修飾的意味表示語である名詞の語基によって修飾的要素が、その接尾辞や特定の不変化詞などによってそれ以外の能力・関係が表示される<sup>4</sup>。

## 1.2. 〈行為〉の概念

ボージャは、〈行為〉を「〈行為実現因〉たちの特殊な作用 (pravṛttivīśeṣa)」と定義し<sup>5</sup>、基本的には、〈行為〉は、同じ一つの結果を持つ集合体として、一つの動詞語基が一度に表示する〈行為実現因 (能力を持つ実体) たちの異なる複数の作用〉であると考えている。

ŚP 3 (1. 160: 22–24): kim punaḥ sarveṣāṃ kāraṅkāṅām ekā pravṛtṭiḥ, āhosvit pratikāraṅkaṃ bhinnāḥ pravṛttayaḥ kriyeti / na tāvad ādyaḥ pakṣaḥ, sarveṣāṃ ekasyaḥ pravṛtṭer asambhavāt / na hi yaiva kāṣṭhānāṃ pravṛtṭiḥ, saiva devadattasya sthālyādeś ca sambhavati / tasmāt pratikāraṅkaṃ bhinnāḥ pravṛttayo dhātunā yupagad abhidhīyamānāḥ kriyety ucyante /

では、〈行為〉というのは、(1) すべての〈行為実現因〉に属する単一の作用のことなのか、それとも、(2) 〈行為実現因〉ごとに異なる諸作用のことなのか。まず、第一の選択肢は成立しない。なぜなら、すべて [の〈行為実現因〉] に、単一の作用は属しえないからである。というのも、薪 (行為手段) に属するのと同じ作用が、デーヴァダッタ (行為主体) や鍋 (行為間接基体) などに属することはありえない。それゆえに、〈行為実現因〉ごとに異なる諸作用が、一つの動詞語基によって同時に表示されている時に、「行為」と呼ばれるのである。

また、ボージャは、オプションとして、パタンジャリの最終見解である〈共通性としての行為〉 (sāmānyabhūtā kriyā) が〈行為〉であることを認めている。ボージャによれば、それは同じ

一つの結果を生じさせる作用のことであり、普遍が同種の諸個物に属するように、すべての〈行為実現因〉に属している<sup>6</sup>。

### 1.3. 〈行為〉を中心とした事物の関係

ボージャは、話し手の表示意図の世界において、〈行為〉が主要要素として事物が関係しあう様子を次のように簡潔にまとめている。

ŚP 4 (l. 15–29): iha khalu kartrādinām sādhanavyapadeśo dr̥ṣyate / sa ca sādhyam antareṇānupapannaḥ / yac ca sādhyam, sā kriyā / tad āha — samhr̥tya kārakair ya eko 'rtho 'bhinirvartyate sa kriyā kriyānimittam kārakam iti / tathā ca kriyāsu svecchayā kārakādini yaḥ prayunkte, na tu taiḥ prayujyate, sa kartā / kartuḥ kriyayānanyayā yad āpyate, tat karma / kriyāsiddhau sādhatamatvena yad avyavahitam vyāpriyate, tat karaṇam / kartrā karmaṇā vā vyavahitaḥ kriyādhāro 'dhikaraṇam / kriyākāryatvenāvadhāritam karmaṇā samyogam yad anubhavati, tat sampradānam / kartrā karmaṇā vā kriyājanyam eva dhrauvyena yad vibhāgam avagāhate, tad apādānam / śrūyamāṇāśrūyamāṇakriyāpadaḥ kriyākṛtaḥ kārakāṇām akārakāṇām ca sambandhaviśeṣaḥ, sa śeṣaḥ / kurvantam evājñāpradānādinaḥ yaḥ kriyāyām niyunkte, sa tatprayojako hetuḥ kartā ca bhavati / evam yathā kāsthādayo lākṣādikam apekṣamāṇā evam mithaḥ sambandhayogyatām anubhavanti, tathā dravyāṇy api kriyāpekṣiṇy eva parasparasambandhāya prabhavantīti kriyām antareṇa jagataś citrakarmaṇa iva mithaḥ samyogo viyogaś ca na syāt /

周知のように、この世界では、〈行為主体〉など〔という〈行為実現因〉〕が「実現手段」と呼ばれるのが経験される。そして、その〔ように呼ばれる〕ことは、実現対象がなければありえない。そして、実現対象であるのが〈行為〉である。それを「〈行為実現因〉たちが一緒になって実現する一つの意味が〈行為〉であり、〈行為〉の機会因が〈行為実現因〉である」と述べている。また、そのような場合、自身の欲求によって〔各自の〕〈行為〉に対して〈行為実現因〉たちを使役するが、それら〔の〈行為実現因〉たち〕によっては使役されない〔〈行為実現因〉〕が〈行為主体〉である。〈行為主体〉の他ならぬ〈行為〉と関係づけられる〔〈行為実現因〉〕が〈行為対象〉である。〔〈行為主体〉の〕〈行為〉の実現のために、最も優れた実現主体として、〔その〈行為〉の〕直前に作用する〔〈行為実現因〉〕が〈行為手段〉である。〈行為主体〉と〈行為対象〉によって介在された形で〔〈行為主体〉の〕行為の基体となる〔〈行為実現因〉〕が〈行為間接基体〉である。行為の結果として確定された〈行為対象〔か行為〕との結合〕を得る〔〈行為実現因〉〕が〈行為受益者〉である。〔〈行為主体〉の〕〈行為〉の結果に他ならない〈行為主体か行為対象との分離〕に〔相対的に〕不動な形で関与する〔〈行為実現因〉〕が〈分離始点〉である。それに関して行為表示語が明言されているか明言されていないような、〈行為実現因〉たちの間、および、非〈行為実現因〉たちの間の特殊な関係が〈残余〉である。現に行為している〔行為主体〕を命令や贈与などによって行為に対して任用する〔〈行為実現因〉〕がそれ（行為主体）を促進する〈原因〉であり〈行為主体〉である。また、

このような場合、薪などが染料などに依存することで相互に関係することができるのと同様に、実体も行為に依存してのみ相互に関係することができる。したがって、行為がなければ、すべて〔の事物〕は、奇術を通じてそうなるようには、相互に結合したり分離したりすることはありえない。

上記のように、あらゆる事物は、〈行為〉があつて初めて関係することができる。〈行為〉と〈行為実現因〉の〈実現対象と実現手段の関係〉という主要な関係だけでなく、A 2.3.50 *ṣaṣṭhī śeṣe* の「残余」という言葉の意味である〈特殊な関係〉、すなわち、〈行為実現因〉の間の関係、付帯的な関係項の間の関係、付帯的な関係項の〈行為〉や〈行為実現因〉との関係も、行為を、それが従属的な形で表示されているにせよ間接的に理解されるにせよ、前提としている。

## 2. 原因の概念の分類

ポージャは、文学の概念を説明するために、世間的言葉を用いて、原因 (*hetu*) を次のように分類している。まず、原因は、大きく (1) 〈実現因〉 (*kāraṅka*) と (2) 〈認識因〉 (*jñāpaka*) の二種に分類される (*ŚP* 3 [1. 163: 4-5])。 (1) 「実現因」は「機会因」 (*nimitta*) と同義語であり、〈機会因〉は、(1-1) 〈すでに作用を始めている事物を促進する機会因〉 (*pravṛttapreraka*) と (1-2) 〈まだ作用を始めている事物を促進する機会因〉 (*apravṛttapreraka*) の二種に分類される。さらに、(1-2) 後者は (1-2-1) 〈命令 (*vidhi*) などを本質とする機会因〉 (*vidhyādirūpa*) と (1-2-2) 〈上記以外の機会因〉 (*nimittarūpa*) に分類される (*ŚP* 4 [1. 239: 3-4])。

## 3. 文学における原因に関する類似概念の差異化

以下では、文学の原因に関わる概念 〈行為実現因〉 (*kāraṅka*)、〈原因〉 (*hetu*)、〈目的性〉 (*tādarthyā*)、〈特徴〉 (*lakṣaṅa*) に限って、ポージャがどのように差異化しているかについて見ていく。

### 3.1. 行為実現因

ポージャは、文学術語「実現因」 (*kāraṅka*) によって表示される 〈行為実現因〉 を「行為の機会因」 (*kriyānimitta*) と定義し、行為を実現する能力を持つ実体であると主張している<sup>7</sup>。行為の基体である 〈行為主体〉 (*kartr*)、行為と関係づけられる 〈行為の結果の基体〉である 〈行為対象〉 (*karman*)、行為主体の行為実現の直前に働く 〈行為手段〉 (*karana*)、結果的に行為対象か行為と結合する 〈行為受益者〉 (*sampradāna*)、行為が生み出す分離の始点である 〈分離始点〉 (*apādāna*)、行為主体か行為対象を通じて間接的に行為の基体となる 〈行為間接基体〉 (*adhikarāṅa*) という六種に分類される<sup>8</sup>。〈行為主体〉以外のそれによって促進される 〈行為実現因〉

は、各自の個別的作用に関しては自主的な〈行為主体〉であるが、〈行為主体〉の作用に関しては自主的ではなくなり、上記のように区別して呼ばれる。

〈行為実現因〉の特質は、行為表示語の動詞語基の意味である行為のみを実現対象領域とすることである<sup>9</sup>。したがって、実体や性質の実現因、および、その動詞語基の意味に含まれる個別的作用を持たない〈行為の実現因〉は、〈行為実現因〉ではない。

### 3.2. 原因

文法学における「原因」(hetu)には、文法術語「原因」によって表示される〈行為主体の促進主体〉、および、世間的言葉「原因」によって表示される〈結果実現因〉という二種がある。

#### 3.2.1 行為主体の促進主体

ボージャは、〈行為主体の促進主体〉を「すでに行為に従事している自主的な行為主体を使役する主体」と定義し、〈行為実現因〉である行為主体に分類している<sup>10</sup>。〈行為主体の促進主体〉は、NiC接辞の意味である〈促進主体の作用〉(hetumat, prayojakavyāpāra)の〈行為主体〉であるが、促進対象である行為主体の行為に対しては自主的ではない。ボージャは、〈行為主体の促進主体〉を、〈行為主体の行為を促す主体〉(preraka)、〈行為主体の行為に適した主体〉(anukūla)、〈行為主体の行為を認識させる主体〉(pratyaṅyaka)という三種に分類している<sup>11</sup>。

〈行為主体の促進主体〉の特質は、すでに自主的に行為に従事している行為主体のみをその行為をやめないように促進することである。したがって、行為主体以外の事物や、まだ行為に従事していない未来の行為主体を促進するものは、〈行為主体の促進主体〉ではない<sup>12</sup>。

#### 3.2.2 結果実現因

ボージャは、〈結果実現因〉を「結果を生み出す能力を持つ事物」と定義し、その能力を接尾辞の意味としての特殊な関係(sambandhaviśeṣa)に分類している<sup>13</sup>。〈結果実現因〉を表示する「原因」(hetu)は、A 2.3.23 hetau「名詞語基の後ろに〈結果実現因〉の能力の意味で第三格接尾辞が生じる」、A 3.2.126 lakṣaṇahetvoḥ kriyāyāḥ「別の行為の〈特徴〉と〈原因〉である行為を表示する動詞語基の後ろのIATの代わりにŚatRとŚānaCという代置要素が生じる」、A 3.3.156 hetuhetumator liṅ「〈結果実現因〉と〈結果〉である行為を表示する二つの動詞語基の後ろにIINが生じる」などで使用されている。ボージャは、〈結果実現因〉を〈IINなどによって表示される実現因〉(A 3.3.156)、〈satによって表示される実現因〉(A 3.2.126)、〈ニパータなどによって表示される実現因〉<sup>14</sup>、〈第三格接尾辞によって表示される実現因〉(A 2.3.23,25)、〈第五格接尾辞によって表示される実現因〉(A 2.3.24-25)、〈第一格接尾辞によって表示される実現因〉<sup>15</sup>という六種に分類している。

〈結果実現因〉の特質は、実体・性質・行為という三者を対象領域として実現とすることであり、また、自身の作用が行為表示語の動詞語基によって表示されないことである。したがって、

その三者との随伴関係である〈sahaの意味〉を持つ事物は三者を対象領域とするとしてもそれらを実現しない点<sup>16</sup>、また、〈行為実現因〉は実体と性質を実現しない点<sup>17</sup>、〈結果実現因〉ではない。さらに、〈結果実現因〉は、〈行為〉を対象領域とする場合には、原因 (kāraṇa) ではなく、実質的に結果・目的 (kārya) として行為表示語の動詞語根の意味に含まれる個別的作用を持たない形で存在する。その場合、〈行為〉に対して〈結果実現因〉は目的となり、手段とは違って代替不能なものになる。この点で、代替可能な〈行為手段〉は〈結果実現因〉ではないことになる<sup>18</sup>。

### 3.3. 目的性

ボージャは、〈目的性〉 (tādarthyā) を「結果、あるいは、結果の基体に属する〈原因を促進する能力〉」と定義し、特殊な関係に分類している<sup>19</sup>。〈目的性〉は、第四格接尾辞、tumUN 接辞、NvuL 接辞などによって表示される<sup>20</sup>。tādarthyā という語形は、tadartha という複合語に属性接辞 Śyañ が生じたものとして派生説明される<sup>21</sup>。tadartha という複合語は、tasmāy idam というように分析される caturthitātpuruṣa として解釈され、分析文における idam の指示対象、原因である意味を表示するということが正統的な見解である。しかし、ボージャは、yadartham ... tad ... という用例で tad が指示する意味である〈結果・目的に変容した指示対象〉、すなわち、結果である意味が tadartha という言葉によって表示されるという見解を採用している<sup>22</sup>。これは、tādarthyā という言葉の属性接辞 Śyañ が原因ではなく結果の能力を表示するようにするための工夫である。

ボージャは、〈目的性〉を、〈行為の目的性〉 (kriyātādarthyā)、〈実体の目的性〉 (dravyatādarthyā)、〈行為に対する実体の目的性〉 (kriyādravyatādarthyā)、〈実体に対する行為の目的性〉 (dravyakriyātādarthyā)、〈質料因に対する変容体の目的性〉 (prakṛtīvikāratādarthyā)、〈行為に対する行為実現因の目的性〉 (kriyākāratādarthyā) という六種に分類している<sup>23</sup>。

〈目的性〉の特質は、自身に有利な形でのみ原因を促進する結果の能力であることである。それゆえに、それを表示する第四格接尾辞などは結果表示言語項目の後ろにしか生じない<sup>24</sup>。また、〈目的性〉という能力は因果関係を含意しているので、それが表示された時には〈結果実現因〉の能力も理解されるから、原因表示語の後ろにさらにその能力を表示するための言語項目は生じない。この点で、〈結果実現因〉から差異化される。

### 3.4. 特徴

ボージャは、〈特徴〉を〈認識因〉と同定し、「[[自身以外の] 別の単語の意味の画定のための原因」と定義し<sup>25</sup>、その能力を特殊な関係に分類している。〈特徴〉は、A 1.4.84 anur lakṣaṇe 「anu という言語項目は、原因の能力を開顕する場合に「前後置詞」と呼ばれる」、A 1.4.90 lakṣaṇetthambhūtākhyānabhāgavīpsāsu pratiparyānavah 「prati, pari, anu という言語項目は、〈特徴〉、〈特殊化した事物の表現手段〉、〈分け前〉、〈遍充意図〉という領域で、特定の関係を開顕する場合に「前



後置詞」と呼ばれる」、A 2.3.21 *itthambhūtalakṣane* 「特殊化した事物の特徴を表示する名詞語基の後ろに第三格接尾辞が生じる」 A 2.3.20 *yenāṅgavikāraḥ* 「集合体の変化の特徴となる構成要素を表示する名詞語基の後ろに第三格接尾辞が生じる」 Vt 3 on A 2.3.13 *utpātena jñāpyamāne* 「予兆によって認識されている事物を表示する名詞語基の後ろに第四格接尾辞が生じる」 A 2.3.37 *yasya ca bhāvena bhāvalakṣaṇam* 「別の無分節行為を認識させる無分節行為の基体（行為主体と行為対象）を表示する名詞語基の後ろに第七格接尾辞が生じる」 3.2.126 *lakṣaṇahetvoḥ kriyāyāh* 「主要な行為の〈特徴〉と〈原因〉である行為を表示する動詞語基の後ろの IAT の代わりに ŚatR と ŚānaC という代置要素が生じる」などに関わる概念である。ボージャは、A 1.4.84の特徴を「結果実現因である特徴」(*hetulakṣaṇa*) と呼び〈結果実現因〉であるとし<sup>26</sup>、残りの上記の規則に基づいて、〈実体の特徴〉(*dravyalakṣaṇa*)、〈特殊化した事物の特徴〉(*itthambhūtalakṣaṇa*)、〈変化の特徴〉(*vikāralakṣaṇa*)、〈予兆という特徴〉(*utpātalakṣaṇa*)、〈無分節行為の特徴〉(*bhāvalakṣaṇa*)、〈行為の特徴〉(*kriyālakṣaṇa*) という六種に分類している<sup>27</sup>。

特徴は、〈認識因〉である点で、それ以外が属する〈実現因〉から差異化される。また、〈結果実現因〉などの場合と同様に、その作用は行為表示語の動詞語基によって表示されない。

## 略号と参考文献

### 一次文献

- A: *Aṣṭādhyāyī* of Pāṇini. See Cardona [1997].  
 KS: *Kumārasambhava* of Kālidāsa. See Dwivedi [2004].  
 Kāśikā: *Kāśikāvṛtti* of Jayāditya and Vāmana. See Mīśra [1985].  
 MBh: *Vyākaraṇamahābhāṣya* of Patañjali. See Vedavrata [1962–63].  
 PM: *Padamañjarī* of Haradatta Mīśra. See Mīśra [1985].  
 Pradīpa: *Pradīpa* of Kaiyaṭa. See See Vedavrata [1962–63].  
 Prakāśa: *Prakāśa* of Helārāja. See Subramania Iyer [1963].  
 ŚP: *Śṛṅgāraprakāśa* of Bhoja Deva. See Dwivedi [2007].  
 S: *Sarasvatikanṭhābharāṇa* of Bhoja Deva. See Cintamani [1937].  
 VP: *Vākyapadīya* of Bhartṛhari. See Rau [1977].  
 Vt: *Vārttika* of Kātyāyana. See Vedavrata [1962–63].

### 二次文献

- Cardona [1997]: Cardona, George, *Pāṇini: His Work and Its Traditions*, Vol. 1, 2nd Edition, Revised and Enlarged. Varanasi: Motilal Banarsidass Publishers.  
 Cintamani [1937]: Cintamani, T.R., Ed., *Sarasvatikanṭhābharāṇa of Bhojadeva*. Madras: University of Madras.  
 Dwivedi [2004]: Dwivedi, Rewāprasāda, Ed., *Kumārasambhavamahākāvyaṃ of Mahākavi Kālidāsa with*

the Commentaries 'Prakāśikā' by Śrī Aruṅagirinātha 'Vivarana' by Paṇḍita Śrī Nārāyaṇa, Varanasi: Sampurnanand Sanskrit University.

Dwivedī [2007]: Dwivedī, Rewāprasāda, Ed., *Śṛṅgāraprakāśa* by Bhojarāja, 2 Vols. Varanasi: India Gandhi National Centre for the Arts and Kālidāsa Samsthāna.

Mīśra [1985]: Mīśra, Śrīnārāyaṇa, Ed., *Kāśikāvṛtti of Jayāditya-Vāmana (Along with Commentaries Vivaraṇapañcikā-Nyāsa of Jinendrabuddhi and Padamañjarī of Haradatta Mīśra)*, 6 Vols. Varanasi: Ratna Publications.

Raghavan [1978]: Raghavan, V, *Bhoja's Śṛṅgāra Prakāśa*, 3rd Revised Enlarged Edition. Madras: Punarvasu.

Rau [1977]: Rau, Wilhelm, *Bhartrhari's Vākyapadiya: Die Mūlakārikās nach den Handschriften herausgegeben und mit einem Pāda-Index versehen*. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.

Subramania Iyer [1963]: Subramania Iyer, K.A., *Vākyapadiya of Bhartrhari with the Commentary of Helārāja*, Kāṇḍa III, Part 1. Poona: Deccan College.

Vedavrata [1962–63]: *Śrībhagavatpatañjaliviracitam Vyākaraṇamahābhāṣyam*. 5 Vols. Gurukul Jhajjar (Rohatak): Harayāṇa Sāhitya Samsthānam.

小川 [2000]: 小川英世, 「バルトリハリの〈能成者〉論」『戸崎宏正博士古稀記念論文集: インドの文化と論理』所収, 533–584.

小川 [2018]: 小川英世, 「Vākyapadiya「〈能成者〉詳解」(Sādhanasamuddeśa)の研究 – VP 3.7.148–150 : 〈基体〉(adhikaraṇa) 論 (1)」『比較論理学研究』15 : 19–53.

<sup>1</sup> 『シュリンガーラプラカーシャ』の内容と構成については、Raghavan [1978 : 8–66] を見よ。

<sup>2</sup> ボージャは、「性質」(guṇa)、「属性」(dharma)、「効力」(sāmarthyā)、「結果実現性」(arthakriyākāritva)、「卓越性」(atīśaya)、「能力」(śakti) は同義語であると述べている。

ŚP 6 (l. 299: 2): guṇo dharmah sāmarthyam arthakriyākāritvam atīśayaḥ śaktir iti caiko 'rthaḥ /

<sup>3</sup> ŚP 4 (l. 142: 4–8): tatra padyate 'nenārtha iti padam / tat tridhā kriyārūpaṁ kārakārūpaṁ upaskārarūpaṁ ca / teṣu sādhyarthābhīdhāyī kriyārūpaṁ / sādhanārthābhīdhāyī kārakārūpaṁ / sādhyasādhanayor bhūṣaṇādībhūtam upaskārarūpaṁ / (\*upaskārarūpaṁ) em.; upaskāram ŚP) (「それ(言語項目)のうち、意味を理解する手段が単語である(karanavyutpatti)。それ(単語)は、行為単語、行為実現因単語、修飾単語という三種に分類される。それらのうち、行為単語は実現対象である意味を表示するものであり、行為実現因単語は実現手段を表示するものであり、修飾単語は実現対象と実現手段の飾りなどである〔意味を表示するものである〕」)

<sup>4</sup> ボージャによれば、〈能力を持つ実体〉のうち、実体は名詞語基によって表示され、能力は格接尾辞によって表示される

ŚP 6 (l. 296: 5–7): dvidhā hi dravyaṁ sattvabhūtam asattvabhūtam ca / tayoh śaktisāṅkhyāśrayaḥ sattvabhūtam vrkṣādyarthah / tadanāśrayo 'sattvabhūtam avyayādyarthah / tad ubhayam apī nirupādhy eva prātipadikenocyate / tadāśritāḥ tu saśaktisāṅkhyāsambandhopādhyo vibhaktyeti / (「というのも、実体は、基体である〔実体〕と基体でない〔実体〕という二種に分類される。その〔二種〕のうち、基体である〔実体〕は、能力と数の拠り所である、「木」など〔という言葉〕の意味であり、基体でない〔実体〕は、それら(能力と数)の拠り所である、不変化詞などの意味である。その二種とも、付帯性を持たない形でのみ、名詞語基によって表示される。一方、その〔二種の実体〕に依拠している能力、数、関係を含めた諸付帯性は、接尾辞によって表示される」)

<sup>5</sup> ŚP 4 (l. 6–7): teṣu kārakānām pravṛttivīśeṣah kriyā / tām dhātvartha ity āmnanti / (「それら〔12種の意味項目〕のうち、〈行為〉は(行為実現因)たちの特殊な作用である。それを「動詞語基の意味」と〔文法学者たちは〕伝統的に呼んでいる」)

また、行為は、順々に生じる〈各行為実現因の個別的作用〉であるが、それらの個別的作用の面を失い、数



yāśrayatvāt saptamivācyo naimittikam adhikaraṇam iti vibhaktam adhikaraṇam / (「【反論】しかし、〈機会因〉は〈実現因〉であるから、また、〈実現因〉は〈促進主体〉に依存しているから、どうして、これ（機会因である行為間接基体）は〈行為実現因〉になるだろうか。【答論】答えよう。〈実現因〉は、(1)すでに発動した〔事物〕を促すものと(2)まだ発動していない〔事物〕を促すもの〔という二種に分類される〕。それらのうち、(1)はNiC接辞の意味領域である。一方、(2)は、(2-1)命令を本質とするものと(2-2)〈機会因〉を本質とする〔二種に分類される〕。それらのうち、(2-1)はIIN接辞、IOT接辞、tavya接辞など(krtya接辞)の表示対象である。…〔中略〕…一方、(2-2)〈機会因〉を本質とする〔〈実現因〉〕は、行為の〔間接的な〕基体であるなら、第七格接尾辞の表示対象であり、「機会因である行為間接基体」と呼ばれる特殊な〈行為間接基体〉である」)

<sup>13</sup> ŚP 6 (l. 290: 22): kārakāṭirekī kriyākārapūrvakāḥ sambandhaviśeṣaḥ śeṣaḥ / (「〔残余〕は、〈行為〉と行為実現因を前提とする、〈行為実現因〉〔の能力〕以外の特殊な関係である」)

ŚP 6 (l. 291: 18-19): saḥārthātādarthyahetulaḥṣaṇopapadaśambodhanādayas tu sambandhaviśeṣā upaskārādhi-kāre 'bhīhitā itī neha pratanyate / (「一方、〔ニパータ〕 saha の意味、目的性、結果実現因〔能力〕、特徴〔能力〕、近接単語、呼びかけなどという特殊な関係は、修飾〔的意味〕論題ですすでに説明したから、ここでは詳説しない」)

<sup>14</sup> ボージャは、肯定と否定を意味するニパータの下位分類(実現因の提示を意味するニパータ)として、「hi” “nu” “atas” “iti” “yat” “tat” “yena” “tena” を例示している。しかし、これらがすべてではなく、また、これらは別の意味でも使用されることを注記している。

ŚP 1 (l. 23: 23): “hi” “nu” “atas” “iti” “yat” “tat” “yena” “tena” itī hetvapadeśārthāḥ /

ŚP 1 (l. 24: 3-4): evam anye 'pi yathāprayogam anustartavyāḥ / ete ca vidhinīśedhāḥ anyatrāpi veditavyā itī //

<sup>15</sup> ボージャは、第一格接尾辞によって表示される実現因の例として、『クマラサンバヴァ』第一章第十一詩節を例示している。durvahaśronipayodharārtāḥ という単語の第一格接尾辞は、重い大きな臀部と乳房に苦しめられていることが、キンナラ女たちがのろい進行をやめないことの実現因であることを表示している。

KS 1.11cd: na durvahaśronipayodharārtā bhīdanti mandām gatim aśvamukhyaḥ // (「〔そこ(ヒマラーヤ)において、〕馬の顔を顔として持つ女(キンナラ女)たちは、苦勞して保持される臀部と乳房によって苦しめられているせいで、のろい進行をやめない」)

<sup>16</sup> ŚP 3 (l. 161: 23): naivam / na hi saḥārthasya dravyādin prati nirvartanabhāvaḥ śabdenocyate / (「このように〔〈結果実現因〉が〈saha の意味〉から差異化されないということ〕はない。なぜなら、〈saha の意味〉に属する〈実体など(実体、性質、行為)に対する実現手段性〕は、言葉によって表示されないからである」)

<sup>17</sup> VP 3.7.25ab: dravyādiviśayo hetuḥ kārakam niyatakriyam / (小川 [2000: 554] 訳「〔原因〕は〈実体〉など〔すなわち、〈実体〉〔属性〕〈行為〉〕を〔実現の〕対象とし、〈行為参与者〕は〔実現対象を〕〈行為〕に限定する」)

<sup>18</sup> VP 3.7.26: kriyāyai karaṇam tasya drṣṭaḥ pratinidhis tathā / hetvarthā tu kriyā tasmān na sa pratinidhiyate / (小川 [2000: 554] 訳「〔『米によって供儀をなすべし』(vrīhibhir yajeta) といった場合、米といった〕〈手段〉は〔供儀という〕〈行為〉のためである。かくして、その〔手段〕には代用が見られる。一方、〔彼はヴェーダ学習のために住んでいる〕(adhyayanena vasatī) といった場合、住むという〕〈行為〕は〔学習という〕〈原因〕を目的とする。それゆえ、その〔原因〕は代用されない」)

ŚP 3 (l. 161: 26-27): kriyāyai karaṇam tasya drṣṭaḥ pratinidhis tathā / hetvartho 'pi kriyāhetur na ca pratinidhiyate / (「〔必ず〕〈行為〉のために〔行為手段〕はある。そのような場合、それ(行為手段)の代替が経験される。〔原因〕〔という言葉〕の意味として〔行為の結果実現因〕もあるが、〔それは〕代替されることはない」)

なお、上記の理屈は、〈行為手段〕だけでなく、すべての〈行為実現因〕に当てはまるという考えがあったことをヘーラーラージャは述べている。

Prakāśa on VP 3.7.26 (256: 20-22): ata eva kecit karaṇāśabdo 'tra sarvakārakavacano jātau caikavacanam itī sarvāni kārakāṇi gunabhūtānīti guṇasya pratinidhir upapadyata itī vyācaksate / (「だからこそ、或る〔学者〕たちは、〔ここで karaṇam という言葉はすべての〕〈行為実現因〉を表示している。そして、普遍の意味で単数接尾辞が生じている。したがって、すべての〈行為実現因〕は従属要素であるから、従属要素として代替される」)と注釈している」)

<sup>19</sup> ŚP 5 (l. 272: 21): kāryasya kāryiṇo vā karaṇam prati prayojakatvaṃ tādarthyam / (「結果、あるいは、結果の基体に属する〔原因〕に対する促進主体の能力〕が〔目的性〕である」)

<sup>20</sup> Vt 1 on A 2.3.13 caturthividhāne tādarthyā upasāṅkhyānam /

この追加規定は、A 2.1.35 caturthī tadarthārthabaliḥitasukharakṣitaiḥ によって示唆されるので不要だというのがパタンジャリの見解であるが、ボージャはその必要性を認めている。

S 3.1.238 tādarthyē // (「〔目的性〕の意味で名詞語基の後ろに第四格接尾辞が生じる」)

A 3.3.10 tumunṅvulau kriyāyām kriyārthāyām / (「行為のための行為を表示する近接単語がある時、動詞語基の後ろに未来時の行為の意味で、tumUN 接辞と ṅvuL 接辞が生じる」)

<sup>21</sup> MBh on A 2.3.13 (2. 785: 1-2): kim idaṃ tādarthyam itī / tadarthasya bhāvas tādarthyam / tadartham punaḥ kim / sarvanāmano 'yam caturthyantasyārthāśabdena saha samāsaḥ / (「〔問〕この tādarthyā とは何か。【答】tadartha の属性が tādarthyā である。【問】では、tadartha とは何か。【答】この〔語形〕は、〔A 2.1.36 による〕第四格接尾辞で終わる代名詞 (tasmai) の artha という言葉との複合である」)

<sup>22</sup> ŚP 3 (l. 162: 14-19): tasmai tadartham itī sarvanāmnā yo 'rthāḥ pratipadyate, sa eva svakāranāpekṣayā prāpi-

tavyatirekaś caturthyā sambadhyate / yathā “yadartham asya mantrah, tad anenādhigatam” iti sarvanāmārtha eva kāryayogī, tathēhāpi tacchabdopātta evārthaḥ prayojanatayā vipariṇatas tadarthaśabdenābhidhiyate\* / bhāvapratyayānto ‘py asau kāryagatam eva rūpam viśeṣeṇācaṣṭe — kāryasya kāraṇam prati prayojakatvam tadarthyam iti / (\* tadarthaśabdenābhidhiyate] em.; tadartham śabdo nābhidhiyate ŚP) (「[tadartha は〈目的としてのそれ〉(tasmai) である]というように、[tadartha の前分である] 代名詞 [「それ」(tad)] によって理解される意味のみが、自らの原因に関して差異 (原因との差異) を獲得させられた形で、第四格接尾辞と結びつく。例えば、「そのために彼のマントラがある時、それはこの [マントラ] によって達成される」という [表現] において、代名詞 [「それ」] の意味のみが操作と結びつく。それと同様に、この [tadarthyam という表現] においても、「それ」という言葉によって表示された意味のみが、目的として変容した形で、tadartha という言葉によって表示される。その [tadartha という言葉] は、属性接辞で終わる場合 (tadartha) も、結果に属する本質 (能力) のみを [原因に属する能力とは] 区別して表示する。「tadartha は、結果に属する (原因に対する促進主体の能力) である」というように) ]

ヘーラーラージャは、tatpuruṣa では後分の意味が主要要素であるという理由から、tadartha という複合語の意味は結果ではなく原因であるとし、ボージャが採用するこの見解を否定している。

Prakāśa on VP 3.7.27 (258: 4–9): kāryam eva prayojakatayā pariṇatam tadartham ity ucyata ity ayuktam abhidhānam / uttarapadārthapradhānavāt tadarthaśabdasya kāraṇavacanatā nyāyā yataḥ / ata eva hetuvānugataṁ tadarthyam / kāraṇaviśeṣo na kāryam / “yadartham asya gamanam, tad anena sādhitam” ity atra tūpasarjanasyaiva yacchabdenoddīṣṭasya samānādhikaraṇena tacchabdena nirdeśāt sarvanāmārthaḥ kāryayogī / na tv etāvateha sarvanāmārthasya prādhānyam, uttarapadārthe gunatvāt / (「結果こそが促進主体として変化した時に tadartham と呼ばれると言うことはできない。なぜなら、[tatpuruṣa においては] 後分 (artha) の意味 [である原因] が主要要素であるから、tadartha という言葉は原因を表示するということが理にかなうからである。だからこそ、tadartha は、原因性を伴う。[すなわち、] 特殊な原因 [の能力] であって、結果 [の能力] ではない。「一方、「x のために彼の進行行為がある時、x はこの [進行行為] によって実現される」というこの [事例] において、まさに従属項目である yad という言葉によって指示された [意味] が、[それと] 同一の意味を指示する tad という言葉によって指示されるから、代名詞 [tad] の意味が操作を受けることは理にかなう。しかし、これだけの理由で、この [tadartha という事例] において、代名詞 [tad] の意味が主要要素であることにはならない。なぜなら、後分の意味に対して従属要素だからである」)

<sup>23</sup> ŚP 5 (1. 272: 22–23): tat soḍhā kriyātadarthyam dravyatadarthyam kriyādravyatadarthyam dravyakriyātadarthyam prakṛtīvikāratadarthyam kriyākāratadarthyam iti / (「それ (目的性) は、〈行為の目的性〉、〈実体の目的性〉、〈行為に対する実体の目的性〉、〈実体に対する行為の目的性〉、〈質料因に対する変容体の目的性〉、〈行為に対する行為実現因の目的性〉という六種に分類される」)

<sup>24</sup> ŚP 3 (1. 162: 5–6): ayam ca viśeṣaḥ — kāryavācīno eva tadarthyē caturthī, kāryavācīno nimittavācīnaś ca hetau\* trītyetī / (\*hetau] em. hetos tu ŚP) (「また、次のような違いもある。〈目的性〉を意味する第四格接尾辞は、結果を表示する [名詞語基] の後ろにのみ生じ、〈結果実現因 [能力]〉を意味する第三格接尾辞は、結果を表示する [名詞語基] と機会因を表示する [名詞語基] の後ろに生じる」)

<sup>25</sup> ŚP 3 (1. 163: 4–6): lakṣaṇam api tadarthyavad dhetuviśeṣa eva / siddho hi hetuḥ kārako jñāpakāś ca / tatra kārakasya svayāpārānāśrayaṇe hetur ity ākhyā, jñāpakasya lakṣaṇam iti / padārthāntaraparicchedaheturā hi lakṣaṇārthaḥ / (「[特徴] も、〈目的性〉と同様に、特殊な原因にはかならない。というのも、原因は、〈実現因〉と〈認識因〉[という二種に分類されること] が確立されている。その両者のうち、〈実現因〉は、[行為主体の行為に関して] 自らの働きが認められない時に「結果実現因」と呼ばれ、〈認識因〉は「特徴」と呼ばれる。なぜなら、「特徴」[という言葉の] 意味は、[自身とは異なる] 別の単語の意味の画定の原因の能力だからである」)

<sup>26</sup> ŚP 1 (1. 35: 14–15): anur hetulakṣaṇasahārthahīnatālakṣaṇetthambhūtākhyānabhāgavipsāsu karmapravacanīyah /

ŚP 3 (1. 163: 9–10): kvacit tu hetur api lakṣaṇam bhavati, yathā “śākalyasya saṁhitām anu prāvārṣad anaḍudya-jñam anv asiṅcat prajāḥ parjanyaḥ” iti / (「一方、或る場合には、〈結果実現因〉も〈特徴〉となることがある。例えば、「雨神は、シャーカリヤのサンヒターを耳にしてから雨を降らせた。雄牛犠牲祭を目にしてから人々に雨を降らせた」という [事例における] ように」)

S 1.1.160 anur hetulakṣaṇe//

<sup>27</sup> ŚP 5 (1. 274: 14–16): hetur eva jñāpako lakṣaṇam / tat soḍhā dravyalakṣaṇam itthambhūtālakṣaṇam vikāralakṣaṇam utpātalakṣaṇam, bhāvalakṣaṇam kriyālakṣaṇam iti / (「[特徴] は認識因にほかならない。それは、〈実体の特徴〉、〈特殊化した事物の特徴〉、〈変化の特徴〉、〈旗の特徴〉、〈無文節行為の特徴〉、〈行為の特徴〉という六種に分類される」)

(いしむら すぐる：人間文化研究所 客員研究員)